

「俺が引き受けたから心配するな」

「ご開山さま、ありがとうございました。あなたのおかげで私もあなたと同じお念仏をいただいて、あなたと同じご信心をいただいて、同じお浄土で今度は遇わせていただきます」と、お礼いうたためにお参りにこられたんや。それが報恩講です。



阿弥陀さまのお救いがいちばんハッキリするのは、「なんまんだぶ」という声です。お念仏を称えればこの声が聞こえてくるはずだ。聞こえなんたら称えなはれ。称えたら聞こえてくるだろう。なんぼ耳が遠うても、自分のいうた声は聞こえるわ。阿弥陀さまがね、「必ずたすけるぞ、私にまかせなさいや」とおっしゃってくださったっているんです。このお言葉に対して、そうやったなあと気がいたら、「ありがとうございます」というたらええ。気がつかんなら黙っとったってええ。いや、「たすける」というてくださったんねんから、黙っとったかて助けてくださる。そうでしょ。信心ちゅうのは、ワシがしっかりすることとちゃいませ。病気でもしてみなはれ、シッカリなんかできますか。そしたらシッカリせよというのは、仏さまが私におっしゃってるんと違うだろ。仏さまのほうか「心配するな、私がシッカリしてるから、俺にまかせとけ」とおっしゃってるんですよ。だから「ありがとうございます」といいなはれ。いえなんたらそれでもええわ、それでええ。まかせといたらええんだ。それが「まかせる」ということや。阿弥陀さまは「たすけてやるぞ」とおっしゃる。それが「なんまんだぶつ」という言葉ですよ。「俺が引き受けたから心配するな」というのが、南無阿弥陀仏という言葉の意味なんだ。ご開山はそうおっしゃる。

梯 實圓和上のご法話
【伝道】2015 No.84 星野親行師の寄稿より

親鸞聖人のご生涯

親鸞聖人は、1173年5月21日（承安3年4月1日）、京都・白野の里で誕生、9歳で得度（仏門に入り僧となること）された。比叡山で20年間修行されたが、迷いや苦悩から逃れることができなかったため、山を下り、六角堂での救世観音の夢告により法然聖人の門弟となられる。35歳の時、尊修念仏停止によって越後に流罪となり、39歳で赦免の後、妻・恵信さまや家族とともに関東へ移り、約20年間布教を行われた。1224年（元仁元年）に主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』を著された。その後、京都に帰り著述活動を行われ、1263年1月16日（弘長2年11月28日）、90歳で往生された。

★報恩講の案内

の報恩講は

月 日 から

月 日 です。

皆さまそろってお参りください。

切り絵：瓜生智子
編集：重点プロジェクト推進室

2018.09.200.000

浄土真宗本願寺派

（西本願寺）

報恩講を
縁に

「出家学道」

「それで いい」 ありがたい

さまざまに いろいろ あって

喜怒哀楽の中

生きて

老いて

死んでいく

「このまま

死んで行きさえすりゃ

仏のところ だけのう」(足利源左)

なごりおしく 思えども

この世の縁が つきる時

ちから 力なくして 終わるとき

死んでいく

死んでいく そのままが 救われていく 私

安心できない 死にたくない 愚痴無智の まま

「そのまま いい」と聞かせていただき

安心する

その時がくれば その時の姿のまま 死ねばいい

格好など つけられるものでも ないだろう

「それで いい」

ありがたい

ほうおんこう 報恩講とは

真実のみ教えをお示くださった親鸞聖人に感謝し、阿弥陀さまのお救いをあらためて心に深く味わわせていただく、一年で、もっとも大切なご法要が、「報恩講」です。

「報恩講」という名称は、親鸞聖人のひ孫である本願寺第3代覚如上人が、親鸞聖人の33回忌にあわせて『報恩講私記』を著されたことに由来しています。

以来、700年を超える歴史の中で、先人たちが親鸞聖人ご命日の法要を「報恩講」として脈々と受け継ぎ、今日まで大切にお勤めしてきました。

家庭での報恩講をお勤めするとともに、ぜひ一般寺院や本山、別院など全国の浄土真宗のお寺でお勤めされる報恩講に、お参りしましょう。

ほうおんこう きえん
報恩講を機縁に
親鸞聖人のおこころを
より深く味わうために…



〈施本『報恩講』〉 毎年9月1日発行

1部100円+税 / 18.5cm×11cm・40頁

2018年版より、郵便でのお届けにも便利なスリムサイズに変わりました。

※「報恩講」の他、「お盆」「お彼岸・秋」「お彼岸・春」の施本も発行していますので、そちらもぜひお読みください。

——— 施本のお問い合わせは、本願寺出版社まで ———

☎ 0120-464-583

FAX 075-341-7753